

敬語法も日本語の特徴の一つである。敬語法には、「相手を尊敬する“尊敬語”を使って直接敬意を表す方法」と、“謙讓語”を使い、自分を謙へくだることに依って間接的に相手に敬意を表す方法」とある。

例へば、“食べる”といふ意味の言葉に、尊敬語としては“召上る”といふ言葉があり、謙讓語としては“頂く”といふ言葉がある。つまり、相手に対しては「召上って下さい」と言ひ、自分が食べる時には「頂きます」と言ふのである。

“居ゐる”といふ言葉は、尊敬語では「ゐらっしゃる(文語の“居ゐらせられる”の変化したもの)」と言ひ、謙讓語では「ま居まる」と言ふ。だから、「先生は居まられますか」といふ言ひ方をよく耳にするけれども、これは正しい使ひ方ではない。“られる”は尊敬の意味を表す助動詞であるが、“居まる”が謙讓語だからである。

また、“行く”といふ言葉は、尊敬語では「い行いらっしゃる(おいでになる、ともいふ)」と言ひ、謙讓語では“参まる”と言ふ。だから、「一緒に参まりませんか」と誘ふ行き先が神宮ならば正しいけれども、映画館や劇場だったら誤りといふことになる。

また、“言いふ”といふ言葉は、尊敬語では「あ仰あっしゃる(文語の“あ仰あせられ

る”の変化したもの)」と言ひ、謙讓語では“申まず”と言ふ。これも、よく「仰あしゃる」と言ふべき所に「申まされる」といふ言ひ方をする人が居るけれども、先の「居まられる」の場合と同じで、“申まず”が謙讓語なので、これに尊敬を表す助動詞“られる”を着けても、尊敬したことになるのである。

このやうに、日本語には、通常の動詞(例へば、食べる、居る、行く、言ふ)のほかに尊敬語(召上る、居まらっしゃる、行いらっしゃる、仰あしゃる)と謙讓語(頂まく、居まる、参まる、申まず)とあるのである。これを正しく使ひ分けることは、煩わづらしいと言へば確かにさうに違ひないけれども、それが“文化”といふものである。使ひ分けを学ぶ努力を惜しんで自らを卑しめてはならないと思ふ。

すでに度々述べて来たやうに、「心の働きは言葉の働き」であるから、豊かな心は豊かな言葉でこれを養ひ育てるしか手立てはない。確かに複雑な敬語法ではあるけれども、これを正しく使ひ分ける所に日本語の良さ、豊かさがあるのである。敬語法を学ぶことにより、日本人の心の豊かさを養ひ育てて行きたいものである。